

## クラスタ分析による大学生のキャリア発達

### Career Development of University Students using Cluster Analysis

寿 山 泰 二

#### 要旨

大学生のエンプロイアビリティを把握するには、思考特性・行動特性を測定する「企業就職能力尺度」、価値観を測定する「生き方尺度」、性格を測定する「BIG FIVE 尺度」の3尺度が有用である。3尺度を使用すると大学・学部にも所属する学生の平均的特徴が明確になるだけでなく、クラスタ分析を行うことで、タイプ別に詳細な学生分類が可能となり、画一的なキャリア教育ではなく、各大学・学部の特性や事情に応じた効果的キャリア教育、就職支援が可能となる。また、キャリア教育、就職支援の事前・事後に測定・評価することにより、効果測定も容易に行うことができる。3尺度を使用した測定・評価の有用性を実証的に分析・考察している。

キーワード: クラスタ分析、キャリア発達、企業就職能力、価値観(生き方)、性格(BIG FIVE)

#### I. 問題と目的

厚生労働省は、「エンプロイアビリティの判断基準に関する調査報告書」(厚生労働省職業能力開発局, 2001)において、エンプロイアビリティを「労働市場価値を含んだ就業能力、すなわち、労働市場における能力評価、能力開発目標の基準となる実践的な就業能力」と定義付け、労働者個人の基本的能力を見える部分として、A(職務遂行に必要となる特定の知識・技能などの顕在的なもの)及び B(協調性、積極的等、職務遂行にあたり、各個人が保持している思考特性や行動特性に係わるもの)、見えない部分として、C(動機、人柄、性格、信念、価値観等の潜在的な個人的属性に関するもの)の3層に分類・図示している(Figure 1)。

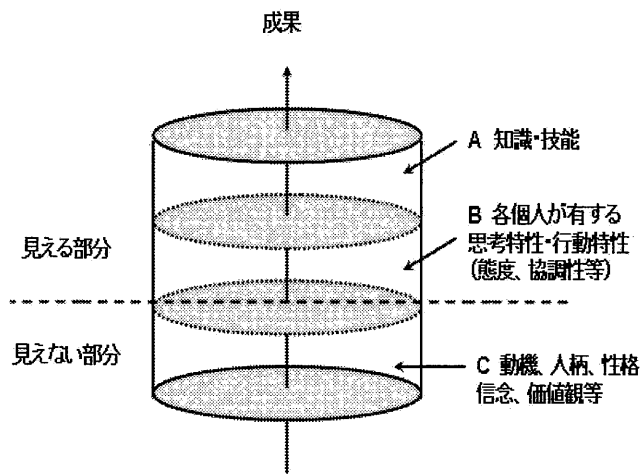


Figure 1 エンプロイアビリティの構造(厚生労働省)

寿山(2007)は、厚生労働省のモデルから大学生のエンプロイアビリティの中核が B の思考特性・行動特性にあるとして、企業就職能力尺度を作成した。現在、大学生の就職採用試験では、B の思考特性や行動特性だけでなく、C の動機、人柄、性格、価値観等も重視し、各企業の経営理念、社風等に合致したエンプロイアビリティの高い人材の採用が行われている。そこで本論文は、大学生のエンプロイアビリティを、B の思考特性・行動特性に C の性格・価値観を加えた包括的な就職能力として捉え、現代大学生の特徴及びキャリア発達をクラスタ分析により詳細に考察する。

また、本論文は、就職能力、価値観、性格の3尺度による大学生のエンプロイアビリティの分析・考察が、各大学の進路指導や就職支援だけでなく、キャリア教育においても、今後の重要な指針となりうる可能性を指摘する。キャリア発達の形成過程や成熟度について理解が深まれば、能力別だけでなく、性格・価値観別の教育・指導なども取り入れることで、より実践的、効率的な教学並びに就職支援も可能にもなると考えられる。

## II. 方法

(1)対象：近畿圏に所在する社会科学系学部 of A 大学の1年生から4年生 195 名(男性：169 名、女性：26 名)、阪神間に所在するスポーツ学科を持つ人文学部系の B 女子大学の3年生及び4年生 55 名(女性：55 名)を分析対象とした。(2)期間：2007 年 11 月中旬～12 月上旬。(3)質問紙の構成：①企業就職能力尺度(寿山,2007)全 30 項目、回答は 5 件法。②生き方尺度(板津, 1992)全 28 項目、回答は 5 件法。③Big Five 尺度(和田, 1996)全 60 項目、回答は 7 件法。(4)手続き：質問紙を各学年のゼミ担当教員に配布を依頼し、授業中に記入・回収する。

### Ⅲ. 結果・考察

#### (1) A大学のクラスタ分析

企業就職能力の下位尺度である創造力、行動力、適応力、情報力、論理力、傾聴力、常識力、価値観(生き方)の下位尺度である能動実践、自己創造、自他共存、無執着心、他者尊重、性格(BIG FIVE)の下位尺度である外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性を変数に階層クラスタ分析(Ward連結、平方ユークリッド距離)を行ったところ、5つのクラスタに分類された(Table 1, Figure 2)。

被験者の約半数近くを占めており、就職能力、価値観(生き方)、性格(BIG FIVE)の各下位尺度得点が平均的で推移している第1クラスタを「平均標準型」、ほとんどの下位尺度得点が最も高く、情緒不安定性の得点が最も低い第2クラスタを「楽観前進型」、他の尺度得点と比較して「考える力」が高く他人と少し距離を置いている第3クラスタを「自己中心型」、各尺度得点が全体的に平均を下回っているのに、情緒不安定性だけが突出して高い第4クラスタを「自信喪失型」、ほとんどの尺度得点が最も低く、情緒不安定性だけが最も高くなっている第5クラスタを「悲観閉塞型」と命名した。

Table 1 クラスタ別の各下位尺度の平均値とSD及び分散分析の結果

	①平均標準型N=90		②楽観前進型N=26		③自己中心型N=36		④自信喪失型N=28		⑤悲観閉塞型N=15		合計N=195		
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値
創造力	3.05	0.52	3.89	0.47	3.47	0.59	2.76	0.53	1.71	0.65	3.10	0.75	46.22 ***
行動力	3.37	0.45	4.08	0.52	3.44	0.59	2.88	0.44	1.71	0.63	3.28	0.75	59.46 ***
適応力	3.39	0.49	4.22	0.41	3.30	0.39	2.45	0.55	1.75	0.63	3.22	0.80	83.10 ***
情報力	3.14	0.52	3.89	0.58	3.31	0.47	2.71	0.47	2.23	0.86	3.14	0.68	27.87 ***
論理力	2.78	0.59	3.33	0.74	3.38	0.54	2.28	0.55	1.77	0.64	2.81	0.76	29.45 ***
傾聴力	3.55	0.68	4.32	0.58	3.15	0.66	2.98	0.73	3.29	0.56	3.48	0.77	17.27 ***
常識力	3.56	0.50	4.29	0.54	3.44	0.52	3.43	0.52	2.71	0.59	3.55	0.63	23.91 ***
就職能力	22.84	1.89	28.03	2.38	23.48	2.37	19.48	1.64	15.15	2.54	22.58	3.75	110.46 ***
能動実践	3.71	0.44	4.32	0.39	3.42	0.44	3.23	0.42	2.43	0.43	3.57	0.62	53.62 ***
自己創造	3.52	0.45	4.24	0.37	3.39	0.49	2.90	0.39	2.13	0.60	3.40	0.68	61.36 ***
自他共存	3.95	0.43	4.49	0.35	3.22	0.47	3.48	0.49	2.73	0.74	3.73	0.67	51.72 ***
無執着心	3.25	0.53	3.86	0.47	3.13	0.39	2.49	0.55	2.03	0.65	3.10	0.70	42.52 ***
他者尊重	3.50	0.49	3.88	0.69	3.01	0.41	3.42	0.50	3.25	0.78	3.43	0.59	11.04 ***
外向性	4.62	0.82	5.53	0.94	4.14	0.48	4.13	0.67	2.97	0.79	4.45	0.97	30.92 ***
情緒不安	4.29	0.83	3.34	1.16	4.40	0.52	5.06	1.09	5.37	1.39	4.38	1.07	16.39 ***
開放性	4.31	0.47	5.22	0.64	4.56	0.72	3.97	0.75	2.86	0.92	4.32	0.83	37.07 ***
誠実性	3.95	0.55	4.38	0.64	3.86	0.51	3.76	0.66	3.64	0.86	3.94	0.63	5.29 ***
調和性	4.70	0.61	5.21	0.70	4.00	0.47	4.19	0.74	3.77	0.58	4.49	0.75	23.90 ***

\*\*\* p<.001

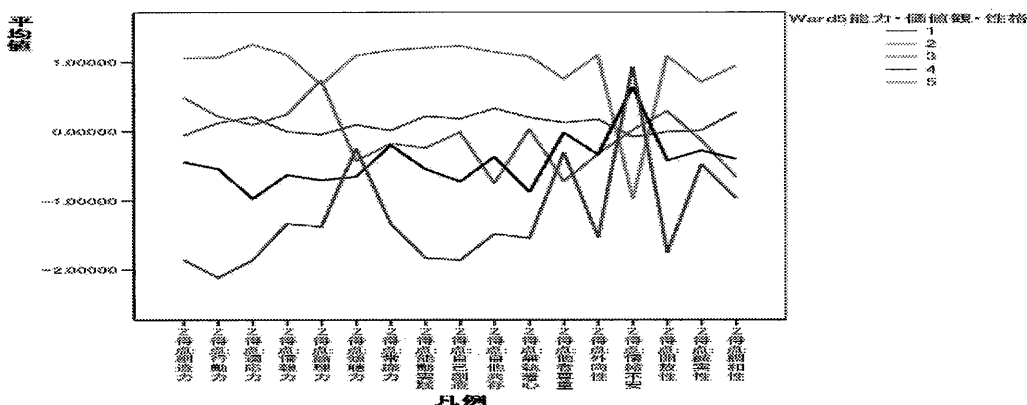


Figure 2 クラスタ別下位尺度別得点

分類された5つのクラスタについて、分散分析及び多重比較(Tukey HSD 法)を行った結果、就職能力において、第1クラスと第3クラスとが有意でなかったほかは、すべて0.1%水準で有意であった(Figure 3)。

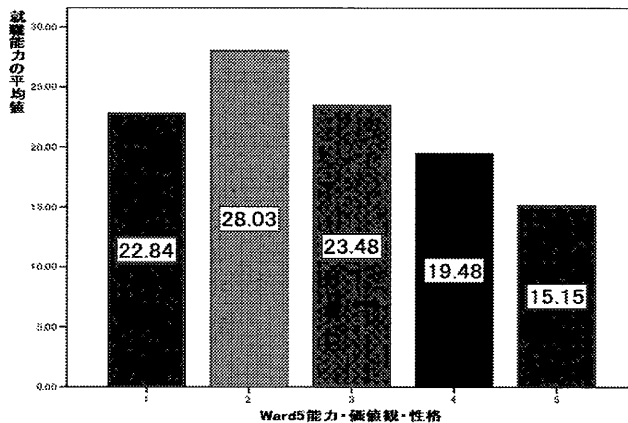


Figure 3 クラスタ別就職能力

クラスタ別に就職能力の下位尺度から詳細に分析・考察してみると、第1クラス「平均標準型」は、各就職能力が平均的で、能力面からは特に強みも弱みも見られない。第2クラス「楽観前進型」は論理力が第3クラスと比較してわずかに低いものの、その他はすべて最も高い得点で、自分の能力にかなりの自信を持っていると思われる。前回調査で見られた「内定確実型」である(寿山, 2007)。

注目すべきは、第3クラスと第4クラスである。第3クラスである「自己中心型」の特徴は、自らの「考える力」には自信を持っているが、そのわりに第2クラス「楽観前進型」よりも行動力が低い。また、他人の意見等に耳をあまり傾けることがないのか、傾聴力が2番目に低い。まさに自己中心的と言えそうである。そして、もう1つ注目すべきが第4クラス「自信喪失型」である。各就職能力が平均以下で、特に適応力の低さが気になる。学業だけでなく、日常生活のいろんな面で不適応が予測される。近年、増加傾向にあるタイプと思われる。第5クラス「悲観閉塞型」は、ほとんどの尺度得点が著しく低く、傾聴力が高く出ている。前回調査における「内定困難型」の第5クラスの傾聴力は、自ら積極的に相手の話や気持ちを聴くという真の傾聴力ではなく、周りから話を聞かされているにも関わらず、自ら「聴く力」があると評価した結果と考えられる。5つのクラスタの就職能力の特徴、特に、第1クラス「平均標準型」と第3クラス「自己中心型」と第4クラス「自信喪失型」の特徴が比較的現れているのが、行動力、適応力、論理力、傾聴力である(Figure 4, Figure 5)。

第1クラス「平均標準型」の行動力と適応力は平均以上で安定している。論理力に若干のばらつきは見られるが、傾聴力は高い。最も平均的な大学生像と言える。第3クラス「自己中心型」は、行動力は第1クラスよりも高いが、逆に、適応力は低い。論理力は高いが傾聴力は低い。他人の話を耳を傾けず、自己中心的な行動が多く、周りに馴染んでいないのではないと思われる。第4クラス「自信喪失型」は、行動力、適応力、論理力、傾聴力すべてが平均よりも低い。「考える力」、それを具現する行動力の不足を十分自覚しているが、なかなか他人の話を素直に聴き入れられず、常に悶々として適応できず、適応力が一層低下して自信を大きく失っているのではないと思われる。

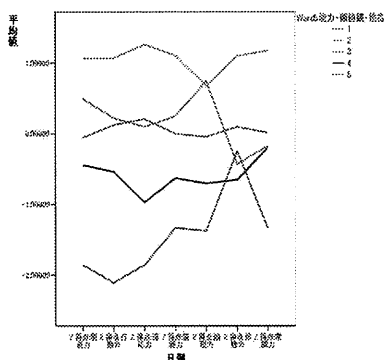


Figure 4 企業就職能力の下位尺度得点

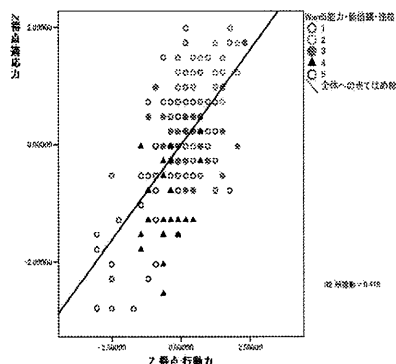


Figure 5 行動力と適応力

次に、価値観(生き方)の下位尺度を詳細に分析・考察すると、第1クラス「平均標準型」は、すべての得点が平均以上で、自他共存が少し高くなっている。これも一般的な多くの大学生が持っている価値観と思われる。第2クラス「楽観前進型」は、すべての尺度得点が最も高く、特に、自己創造の意識が高く、その分、他者尊重が低いのが特徴である。自己実現に向けて突き進んでいるのであろう。第3クラス「自己中心型」の価値観(生き方)は、自他共存と他者尊重が低く、無執着心が高い。交流分析でいう I'm OK, You're OK ではなく、もちろん I'm not OK, You're OK でもない。つまり、I'm OK, You're not OK の自分中心の立場にあることが明確に現れている。第4クラス「自信喪失型」は、逆に、自他共存と他者尊重が高く、無執着心が低い。第4クラスは、I'm OK, You're OK よりも I'm not OK, You're OK の立場と思われる。自己創造が低いことがそれを証明している。第5クラス「悲観閉塞型」は、ほとんどの尺度得点が最も低く、他者尊重が突出して高い。第5クラスは、I'm not OK, You're not OK の立場にいたのであろう。自己効力感が極めて低く、厭世的で不登校から引きこもり、場合によっては、自殺もありうる、実は一番注意して観察していかなければならないグループと思われる(Figure 6, Figure 7)。

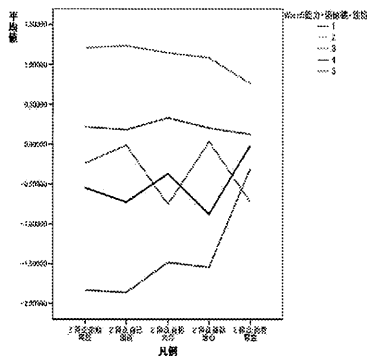


Figure 6 価値観(生き方)の下位尺度得点

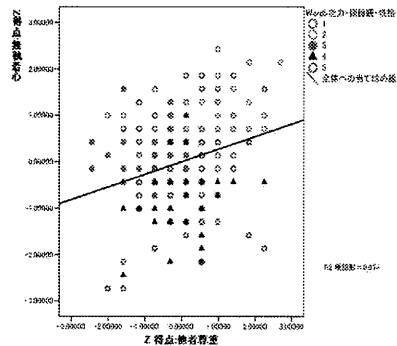


Figure 7 無執着心と他者尊重

最後に、性格(BIG FIVE)の下位尺度を詳細に分析・考察すると、第1クラス「平均標準型」は、情緒不安定性、開放性、誠実性の得点がほぼ平均で、外向性と調和性が少し高い。非常に健全で調和性を重んじる一般的な大学生の性格と思われる。第2クラス「楽観前進型」は、情緒不安定性が最も低く、情緒が安定している。その分、他の性格特性は最も高く、外交的で好奇心旺盛、周りとの関係も友好に保つことができる明るく元気なタイプである。第3クラス「自己中心型」は、第1クラスに比べ、外向性、誠実性、調和性が低い。逆に、開放性が高く、自分の興味・関心のあるものへの知的・欲求はかなり高い。やはり、性格面でも周りの調和よりも自分の考えや気持ちを優先していきたいタイプと思われる。第4クラス「自信喪失型」は、第1クラスよりも、外向性、開放性、誠実性、調和性が低く、情緒不安定性だけが逆に高い。神経症的な性格で常に不安を抱えており、それが自信のなさに結びついていると思われる。第5クラス「悲観閉塞型」は、情緒不安定性の高さもさることながら、外向性、開放性の低さが目に付く。これだけ、自分の内にも外にも興味・関心が持てないと学業だけでなくすべてのことに意欲が沸かず、とても危険な状態にまで辿り着く可能性がある。今後は、観察するだけでなく、早めのサポートが必要と思われる(Figure 8, Figure 9)。

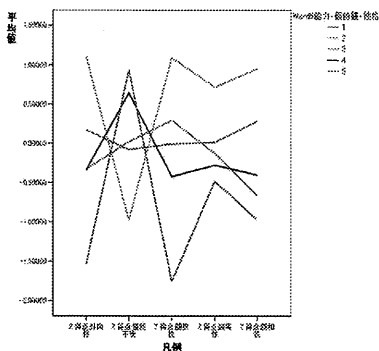


Figure 8 性格(BIG FIVE)の下位尺度得点

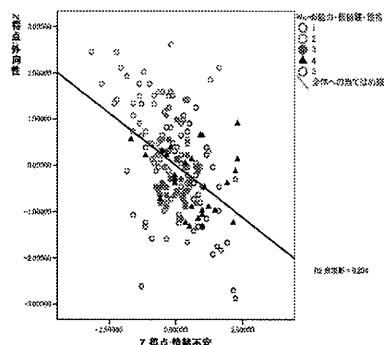


Figure 9 外向性と情緒不安

各クラスターの性格的特徴は、外向性、情緒不安定性、開放性、調和性に見られる。第 1 クラスター「平均標準型」は、外向性は平均以上だが情緒不安定性は平均以下で健全と言えるが、開放性よりも調和性を重んじるのは、仲間はずれを嫌い、突出することを避けているかのように思われる。第 2 クラスター「楽観前進型」は、外向性、開放性、調和性の高さ、情緒の安定性は理想的で自己実現を人生の目的としている。第 3 クラスター「自己中心型」は、外向性は平均以下だが、それほど情緒不安は感じていない。自らの知的好奇心は高いが、調和性はかなり低く、他者からは問題行動が多いと見られていそうだ。第 4 クラスター「自信喪失型」は、情緒不安が強く、外向性、開放性に加え、調和性も低い。第 4 クラスターは、人並み以上にナイーブで傷つきやすく、第 3 クラスターとは反対に、自信のなさが、他人と若干の距離を置かせていると思われる。第 5 クラスター「悲観閉塞型」は、折線グラフを見れば、神経症傾向が顕著に現われており、第 4 クラスターよりもさらにネガティブな性格が見て取れる。

## (2)B 女子大学のクラスター分析

就職能力、価値観(生き方)、性格(BIG FIVE)の各下位尺度を変数としてクラスター分析を行ったところ、A 大学と同様に学生が 5 分類された(Table 2, Figure 10)。第 1 クラスターは、各数値が平均以下だが変動が少なく安定している「消極追従型」、第 2 クラスターは、他人の話をよく聴き調和を図る「自己犠牲型」、第 3 クラスターは、積極的に明るくリーダーシップを取る「楽観前進型」、第 4 クラスターは、能力はあるが、調子の波が大きく落ち込みの激しい「自信喪失型」、第 5 グループは、すべてに自信が持てず、受動的で常に他人の行動を窺っている「悲観閉塞型」と命名した。

分類された 5 つのクラスターについて、分散分析及び多重比較(Tukey HSD 法)を行った結果、就職能力において、第 2 クラスターと第 4 クラスターが有意でなかったほかは、すべて 0.1%水準で有意であった(Figure 11)。

Table 2 クラスター別の各下位尺度の平均値とSD及び分散分析の結果

	①消極追従型N=11		②自己犠牲型N=8		③楽観前進型N=19		④自信喪失型N=14		⑤悲観閉塞型N=3		合計N=55		
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値
創造力	2.65	0.57	2.15	0.61	3.62	0.54	3.11	0.66	1.73	0.76	2.98	0.83	13.49 ***
行動力	3.02	0.42	3.43	0.46	4.25	0.48	3.63	0.52	3.33	0.64	3.68	0.66	12.64 ***
適応力	2.80	0.39	3.20	0.47	3.73	0.59	2.81	0.48	1.40	0.35	3.11	0.76	18.29 ***
情報力	2.47	0.27	2.85	0.46	3.18	0.38	2.81	0.56	2.27	0.46	2.85	0.51	6.19 ***
論理力	2.05	0.40	2.91	0.48	3.11	0.50	2.73	0.64	1.67	0.38	2.69	0.68	10.66 ***
傾聴力	3.30	0.67	4.38	0.55	3.98	0.61	3.55	0.56	2.78	1.02	3.73	0.74	6.20 ***
常識力	3.30	0.59	4.00	0.56	3.96	0.48	3.81	0.65	3.22	0.19	3.76	0.61	3.61 *
就職能力	19.60	1.35	22.91	1.39	25.83	1.43	22.46	1.68	16.40	3.10	22.79	3.10	48.04 ***
能動実践	3.57	0.35	3.96	0.39	4.32	0.31	4.05	0.58	2.76	0.82	3.96	0.58	10.77 ***
自己創造	3.32	0.37	3.46	0.32	4.25	0.47	3.63	0.50	2.62	0.16	3.70	0.62	14.96 ***
自己共存	3.82	0.35	4.33	0.37	4.47	0.42	4.20	0.37	3.60	0.60	4.20	0.47	6.77 ***
無執着心	3.11	0.46	3.40	0.39	3.63	0.60	2.56	0.72	2.13	0.58	3.14	0.75	9.49 ***
他者尊重	3.52	0.56	3.91	0.42	3.96	0.53	3.68	0.60	4.25	0.75	3.81	0.57	1.83
外向性	4.50	0.68	5.01	0.53	6.18	0.54	5.36	0.84	3.78	1.25	5.33	0.99	15.33 ***
情緒不安	4.49	0.77	3.64	0.44	3.42	1.06	5.48	0.47	6.50	0.73	4.36	1.24	20.93 ***
開放性	3.92	0.43	3.83	0.37	4.96	0.53	4.65	0.67	2.61	0.85	4.38	0.82	17.67 ***
誠実性	3.69	0.38	4.71	0.66	4.45	0.81	4.27	0.62	2.83	0.38	4.20	0.79	6.81 ***
調和性	4.48	0.54	5.38	0.85	5.31	0.66	4.40	0.74	4.31	1.13	4.87	0.82	5.55 **
	* p<.05	** p<.01	*** p<.001										

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

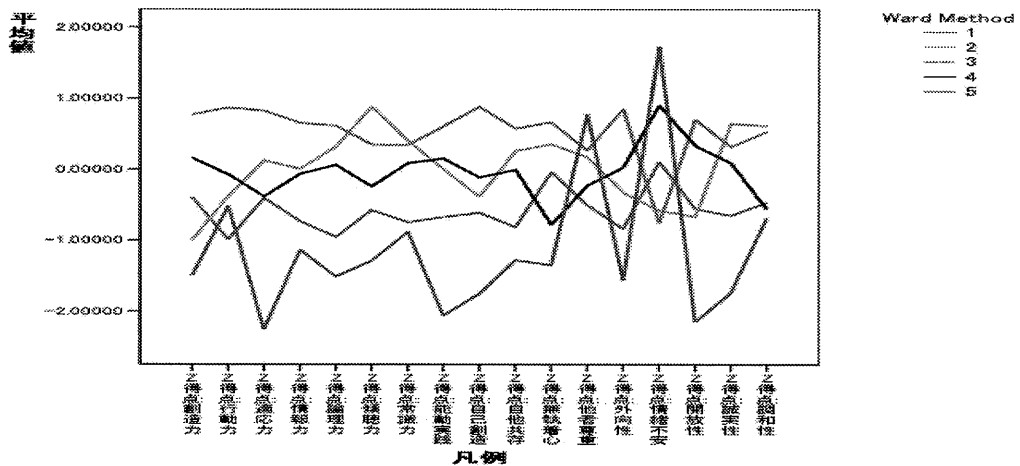


Figure 10 クラスタ別下位尺度別得点

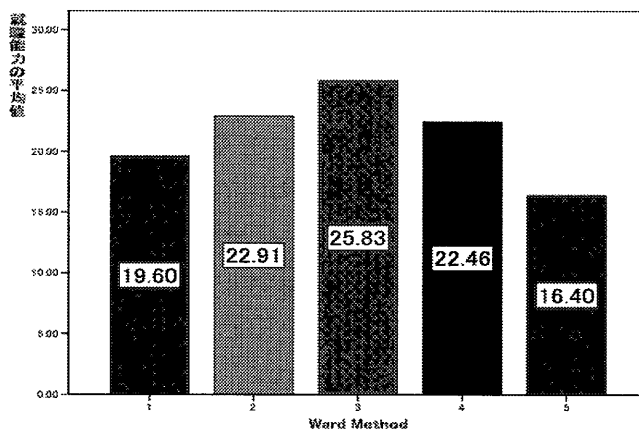


Figure 11 就職能力の平均値

注目すべき点は、第4クラスタの価値観・性格である。前向きで外向的であるにもかかわらず、非常に傷つきやすく、情緒不安定な学生が4分の1近くいることである。これらの学生は、特に、こだわりを持っており、ストレスコントロールがうまく機能していないように思われる。また、第5クラスタは、意欲も外向性もなく、第4クラスタ以上に傷つきやすくナイーブにみえる。他者に合わせようととても苦労しているのではないかとと思われる。第1クラスタと第4クラスタの学生は、各スポーツ競技でレギュラーの座を掴めなかったり、あるいはなかなか力が発揮できなかった時に大きく傷つき落ち込み、1人で悩んでいることが多いのではないかとと思われる。



体育会系のクラブ活動を行っている学生の強みは、能動的な行動力と調和を重んじる常識力のようなものである。明るく元気でやる気のあり、しかも少々のことでは落ち込まないと見られているが、それは、クラブ活動でも優秀な成績を残している上位の学生たちであって、残りの学生は、表面上は元気に頑張っているように見えるが、クラブ活動の方で十分に力を発揮できず、実績が作れず評価してもらえない時はかなりのストレスを抱え、落ち込んでいることも多いように思われる。スポーツに限らず、優劣や結果がはっきり出るものに対しては、うまくいかなかった時にいかにメンタルコントロールができるかが今後の成長の鍵を握るものと思われる。

小さな成功体験を積み重ねていき、自信をつけるところからスタートが必要であろう。また、就職活動においても、現在は成功体験よりも失敗体験をいかに克服してきたかが問われている。企業等も少々のことでは落ち込まない人材を望んでいる。挫折を乗り越える力こそが「生きる力」だと考える。「生きる力」をつけるには、メンタル面をいかに鍛えるかが課題だが、そのためには、認知の修正、多種多様な価値観を受容可能にする思考能力、すなわち、「考える力」を養成する実践的なプログラムの導入も教学の中に必要ではないかと思われる。

### (3) A 大学と B 女子大学の比較分析

#### ① 平均値比較 (Table 3)

Table 3 就職能力・価値観・性格の平均値とSD及びt検定の結果					
	A大学 N=195		B女子大学 N=55		t値
	平均	SD	平均	SD	
創造力	3.10	0.75	2.98	0.83	0.98
行動力	3.28	0.75	3.68	0.66	3.80 ***
適応力	3.22	0.80	3.11	0.76	0.34
情報力	3.14	0.68	2.85	0.51	2.92 **
論理力	2.81	0.76	2.69	0.68	1.06
傾聴力	3.48	0.77	3.73	0.74	2.16 *
常識力	3.55	0.63	3.76	0.61	2.18 *
就職能力	22.58	3.75	22.79	3.10	0.38
能動実践	3.57	0.62	3.96	0.58	4.20 ***
自己創造	3.40	0.68	3.70	0.62	3.02 **
自他共存	3.73	0.67	4.20	0.47	6.01 ***
無執着心	3.10	0.70	3.14	0.75	0.31
他者尊重	3.43	0.59	3.81	0.57	4.27 ***
外向性	4.45	0.97	5.33	0.99	5.90 ***
情緒不安	4.38	1.07	4.36	1.24	0.13
開放性	4.32	0.83	4.38	0.82	0.52
誠実性	3.94	0.63	4.20	0.79	2.29 *
調和性	4.49	0.75	4.87	0.82	3.19 **

\* p<.05    \*\* p<.01    \*\*\* p<.001

まず、就職能力(総合得点)はそれほどの差は見られないが、下位尺度(創造力、行動力、適応力、情報力、論理力、傾聴力、常識力)を詳細に見ていくと互いの特徴が大変明確に現われている。B 女子大学の特徴の一番は、行動力の高さである。特に、体育会系クラブ活動経験者は、自らの行動力を十分認識している模様である。また、組織の中で上下関係から規律等を守るのが当然のことから傾聴力、常識力にも高い数値が出ている。一方の A 大学では、社会科学系学部の影響か、創造力、情報力、論理力が比較して少し高くなっている。これらの数値を考察すると、行動力は確かに高いが、

創造力、論理力といった自ら「考える力」と情報収集に必要な情報力が少し不足しているように思われる。そして、気になるのは適応力が少し低い点である。クラブ活動のほかにもいろんな面において不適応を起こし、精神面で苦勞している学生が意外と多いのではないかとと思われる。

次に、価値観の下位尺度(能動実践、自己創造、自他共存、無執着心、他者尊重)においては、B 女子大学は、大変能動的で自己実現を目指そうという気持ちが強く、自分だけでなく他者理解も十分に見られる点は、やはりクラブ活動等経験から培われるものと思われる。ただ、自分を犠牲にして他者を尊重する傾向も高くなるため、逆に、自己成長を阻害し、自己効力感が減退している学生も出ているのではないかと考えられる。

最後に、性格の下位尺度(外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性)に関しては、見事に外向性が高く、行動力の源になっていると思われる。また、誠実性(勤勉性)や調和性(協調性)も高く、クラブ活動を行う学生の特徴として、主体性と協調性の両方を兼ね備えていることを立証している。これら点をさらに伸ばすことが就職活動でもよい結果につながるとと思われる。

## ② クラスタ別比較

### a) 楽観前進型比較 (Table 4A)

Table 4A 楽観前進型の平均値とSD及びt検定の結果					
	A大学 N=26		B女子大学 N=19		t値
	平均	SD	平均	SD	
創造力	3.89	0.47	3.62	0.54	1.79
行動力	4.08	0.52	4.25	0.48	1.15
適応力	4.22	0.41	3.73	0.59	3.34 ***
情報力	3.89	0.58	3.18	0.38	4.97 ***
論理力	3.33	0.74	3.11	0.50	1.13
傾聴力	4.32	0.58	3.98	0.61	1.88
常識力	4.29	0.54	3.96	0.48	2.10 *
就職能力	28.03	2.38	25.83	1.43	3.84 ***
能動実践	4.32	0.39	4.32	0.31	0.08
自己創造	4.24	0.37	4.25	0.47	0.09
自他共存	4.49	0.35	4.47	0.42	0.16
無執着心	3.86	0.47	3.63	0.60	1.44
他者尊重	3.88	0.69	3.96	0.53	0.45
外向性	5.53	0.94	6.18	0.54	2.96 **
情緒不安	3.34	1.16	3.42	1.06	0.24
開放性	5.22	0.64	4.96	0.53	1.44
誠実性	4.38	0.64	4.45	0.81	0.31
調和性	5.21	0.70	5.31	0.66	0.49

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

「楽観前進型」は情緒不安を除き、各得点が総じて高い特徴を持つ。しかし、比較してみると、このタイプにも各大学の特徴が現れている。例えば、情報力については、情報関連の学部であるA 大学が B 女子大学の数値を上回り有意となっている。逆に、外向性はスポーツ系の B 女子大学のほうが高く有意である。ただ、スポーツ系だからか、女性だからかは不明だが、ストレスコントロール面における B 女子大学の適応力、無執着心の低さ、情緒不安の高さは気になった。

注目すべきは、5 つの価値観である。すべてにおいて有意差が生じていない。つまり、「楽観前進型」の価値観は共通しており、これこそが、このタイプの特徴を如実に表しているものである。

## b) 自信喪失型比較(Table 4B)

Table 4B 自信喪失型の平均値とSD及びt検定の結果

	A大学 N=28		B女子大学 N=14		t値	
	平均	SD	平均	SD		
創造力	2.76	0.53	3.11	0.66	1.85	
行動力	2.88	0.44	3.63	0.52	4.93	***
適応力	2.45	0.55	2.81	0.48	2.11	*
情報力	2.71	0.47	2.81	0.56	0.65	
論理力	2.28	0.55	2.73	0.64	2.40	*
傾聴力	2.98	0.73	3.55	0.56	2.58	*
常識力	3.43	0.52	3.81	0.65	2.06	*
就職能力	19.48	1.64	22.46	1.68	5.52	***
能動実践	3.23	0.42	4.05	0.58	5.27	***
自己創造	2.90	0.39	3.63	0.50	5.23	***
自他共存	3.48	0.49	4.20	0.37	4.83	***
無執着心	2.49	0.55	2.56	0.72	0.32	
他者尊重	3.42	0.50	3.68	0.60	1.48	
外向性	4.13	0.67	5.36	0.84	5.16	***
情緒不安	5.06	1.09	5.48	0.47	1.72	
開放性	3.97	0.75	4.65	0.67	2.89	**
誠実性	3.76	0.66	4.27	0.62	2.41	*
調和性	4.19	0.74	4.40	0.74	0.88	

\* p&lt;.05    \*\* p&lt;.01    \*\*\* p&lt;.001

同じ「自信喪失型」でも、就職能力、価値観、性格すべてに有意差が出ている。それが、各大学のレベルである。スポーツ系ゆえ、行動力、能動実践、外向性は高い。しかし、このタイプの特徴である無執着心の低さ、情緒不安と調和性の高さには有意差がない。B女子大学の学生の方が、感情面の落差が大きく、慎重な支援が必要と思われる。

## c) 悲観閉塞型比較(Table 4C)

Table 4C 悲観閉塞型の平均値とSD及びt検定の結果

	A大学 N=15		B女子大学 N=3		t値	
	平均	SD	平均	SD		
創造力	1.71	0.65	1.73	0.76	0.06	
行動力	1.71	0.63	3.33	0.64	4.06	**
適応力	1.75	0.63	1.40	0.35	0.90	
情報力	2.23	0.86	2.27	0.46	0.08	
論理力	1.77	0.64	1.67	0.38	0.26	
傾聴力	3.29	0.56	2.78	1.02	1.27	
常識力	2.71	0.59	3.22	0.19	1.46	
就職能力	15.15	2.54	16.40	3.10	0.82	
能動実践	2.43	0.43	2.76	0.82	1.07	
自己創造	2.13	0.60	2.62	0.16	1.35	
自他共存	2.73	0.74	3.60	0.60	1.89	
無執着心	2.03	0.65	2.13	0.58	0.27	
他者尊重	3.25	0.78	4.25	0.75	2.04	
外向性	2.97	0.79	3.78	1.25	1.49	
情緒不安	5.37	1.39	6.50	0.73	1.35	
開放性	2.86	0.92	2.61	0.85	0.43	
誠実性	3.64	0.86	2.83	0.38	1.56	
調和性	3.77	0.58	4.31	1.13	1.26	

\*\* p&lt;.01

「悲観閉塞型」は情緒不安が飛び抜けて高いほか、すべての得点が極端に低い。行動力を除いて、他のすべてで有意差が見られなかった。学生生活に楽しみを見出せず、不登校や引きこもり、ニートに向かう、大規模大学ではなかなか把握しづらく支援が難しいタイプと思われる。大学側の早めの支援が必要である。B女子大学の行動力が高いのはスポーツ系特有のものと思われる。

## d) 自己中心型と自己犠牲型の比較(Table 4D)

	A大学 N=36		B女子大学 N=8		t値	
	平均	SD	平均	SD		
創造力	3.47	0.59	2.15	0.61	5.65	***
行動力	3.44	0.59	3.43	0.46	0.09	
適応力	3.30	0.39	3.20	0.47	0.64	
情報力	3.31	0.47	2.85	0.46	2.50	*
論理力	3.38	0.54	2.91	0.48	2.25	*
傾聴力	3.15	0.66	4.38	0.55	4.86	***
常識力	3.44	0.52	4.00	0.56	2.68	*
就職能力	23.48	2.37	22.91	1.39	0.66	
能動実践	3.42	0.44	3.96	0.39	3.20	**
自己創造	3.39	0.49	3.46	0.32	0.41	
自他共存	3.22	0.47	4.33	0.37	6.26	***
無執着心	3.13	0.39	3.40	0.39	1.78	
他者尊重	3.01	0.41	3.91	0.42	5.62	***
外向性	4.14	0.48	5.01	0.53	4.56	***
情緒不安	4.40	0.52	3.64	0.44	3.87	***
開放性	4.56	0.72	3.83	0.37	4.10	**
誠実性	3.86	0.51	4.71	0.66	4.05	***
調和性	4.00	0.47	5.38	0.85	4.44	**

\* p<.05    \*\* p<.01    \*\*\* p<.001

A 大学で独自の特徴が見られた「自己中心型」と B 女子大学で独自の特徴が見られた「自己犠牲型」を比較すると、ほとんどの下位尺度で有意差が出ている。まさに、その大学の本質を表す特徴を備えたタイプに他ならない。

上記 a) から d) を比較検討した結果をまとめてみると、クラスタ分析で同じ「楽観前進型」「自信喪失型」「悲観閉塞型」でも、その中身に差があること、その差こそが、各大学・学部のレベルを表し、上記以外に見られた独自の「自己中心型」「自己犠牲型」こそが、その大学・学部の本質を投影しているクラスタと考えられる。

### ③デンドログラム比較

被験者を変数として、企業就職能力、価値観(生き方)、性格(BIG FIVE)の各下位尺度のクラスタ分析を行ったところ、各大学ともに 4 分類とするのが適当と思われる。それぞれのデンドログラムから各大学の特徴を別角度から比較、考察をする。

#### a) A 大学のデンドログラム(Figure 12)

A 大学のデンドログラムの特徴は、就職能力と価値観の結びつきが強い。価値観は行動への指針となるところから、この結びつきは理解される。一方、性格は就職能力と価値観とは別のクラスタに分離され、中でも情緒不安は独立していることがわかる。男性が多いことが結果として影響している可能性もあると思われる。

Dendrogram using Ward Method(195)

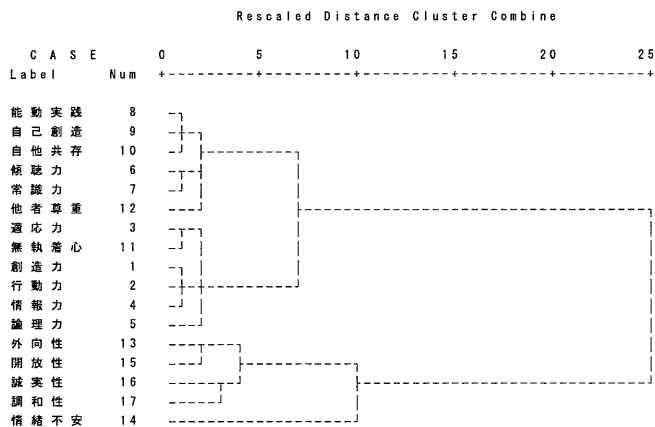


Figure 12 A大学のデンドログラム

## b)B 女子大学のデンドログラム(Figure 13)

B 女子大学のデンドログラムの特徴は、価値観と性格の結びつきが強いことである。逆に、創造力、情報力、論理力といった「考える力」に当たる就職能力が 1 つのクラスタとして分離している。行動力と自己創造、外向性と調和性が結びついているのは、自主性と協調性が養われるスポーツ系の特徴と考えられる。

A 大学と B 女子大学の共通点を分析すると、傾聴力、常識力、他者尊重が結びつき、適応力と無執着心が結びついている。また、情緒不安が独立している。これらを総合して分析してみると、他者との関係性を重視するため、情緒が不安定でストレスコントロールがあまりうまくない現代若者の特徴が浮かび上がってくる。

Dendrogram using Ward Method(55)

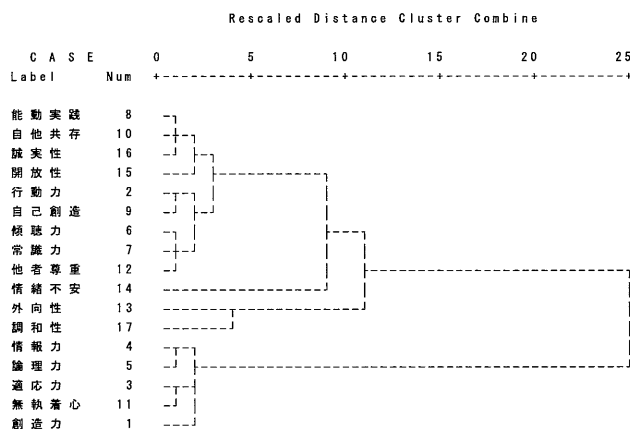


Figure 13 B 女子大学のデンドログラム

#### IV. まとめ

大学生のエンプロイアビリティの中核と思われる思考特性・行動特性並びに価値観、性格をクラスタ分析することで、現代大学生のキャリア発達の成熟度がより明確になった。特に、上・中・下の3分類ではなく、5つのクラスタに分類したことで、A大学においては、中間層に「標準平均型」「自己中心型」「自信喪失型」の3つのクラスタが、B女子大学においては、「自己犠牲型」「消極追従型」「自信喪失型」の3つのクラスタが出現した。各大学・各学部の特徴により、上記以外に独特の新たなクラスタが存在すると考えられる。

思考特性・行動特性を表す「企業就職能力尺度」、価値観を表す「生き方尺度」、性格を表す「BIG FIVE 尺度」の3尺度を活用すれば、①各平均値で各大学・学部の全体的特徴が明確になるとともに、何を教育・支援すればよいか、その項目が明確になる。②クラスタ分析を行うことで、タイプ別に分類され、タイプ別に丁寧な教育、就職支援が可能となるとともに、誰をどのくらいの人数、教育・支援すればよいか、そのターゲット(対象)が明確になる。③キャリア教育や就職支援を行う事前・事後に測定・評価することで、その効果・測定が可能になる。

本研究の知見により、各大学・学部の大学生の特性(就職能力・価値観・性格)が明確になり、画一的なキャリア教育、就職支援ではなく、その特性を踏まえた、より効果的・実践的な各大学独自のキャリア教育、就職支援が推進されることを期待したい。

#### 【引用文献】

- 板津裕己 1992 生き方研究－尺度構成と自己態度との関わりについて カウンセリング研究 25 85-93.
- 厚生労働省職業能力開発局 2001 エンプロイアビリティの判断基準等に関する調査研究報告
- 寿山泰二 2007 企業就職能力に見る大学生のキャリア発達 日本キャリアデザイン研究 Vol.3 15-29.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究 67 61-67.